AI時代に，なぜ「覚える」のか
―英語教育における「知識」の価値を問い直す―

三原　伸剛

生成 AI は便利である．知らない単語があれば尋ねればいい．文法が分からなければ説明してくれる．英文を書けば直してくれる．要約も翻訳も速い．ほんの数秒である．そうなると，一つの疑問が浮かぶ．「いつでも検索・生成できる時代に，知識を自分の頭の中に持つ意味はどう変わるのだろうか．」英単語も英文法も，分からなければ AI に聞けばいい．だったら，わざわざ覚えなくてもいいのではないか．なるほど．もっともらしい．けれども，むしろ逆ではないだろうか．

AI 時代になったからこそ，「何を覚えるのか」を，以前よりきちんと考えなければならないのではないかと考えている．

1．「覚える」と「考える」は相反するのか

例えば，生徒が次の英文を読むとする．

The widespread use of generative AI has made it increasingly difficult for students to determine what knowledge they themselves need to acquire.

単語も構文も十分に身についていなければ，なかなか大変だ．widespread は何だったか．determine の意味は．make it difficult for A to V はどういう構造だったか．what knowledge 以下はどう繋がっているのか．一つずつ考える．前へ戻る．もう一度読む．これでは忙しい．ようやく意味が取れたころには，肝心の「この英文は何を問題にしているのか」を考える余裕がなくなっていても不思議ではない．

一方，語彙や文法・構文知識が十分に身についている生徒は違う．頭はすぐに英文の中身へ向かう．

授業をしていると，この違いにはよく出会う．「この文はどういう意味か」と尋ねていた生徒が，語彙や構文を滑らかに処理できるようになると，「でも，この筆者の考え方だと…」と話し始める．つまり，「問いの質」が変わるのである．この教師としての実感は，認知科学の知見とも重なる．

Sweller (2023)は，新しい情報を扱うワーキングメモリには容量と持続時間の両面で厳しい制約がある一方，長期記憶に蓄積された大量の領域固有知識が，熟達した認知活動を支えると説明している．この知見を英語学習に置き換えて考えるならば，語彙や基本構文を長期記憶からすばやく利用できることによって，より多くの認知資源をその先の意味理解や思考に向けることができる．つまり，「覚えること」と「考えること」は敵同士ではない．考えるために，あらかじめ覚えておかなければならないことがあるということだ．

これは，日々ニュースを読む場面を考えてみても分かる．例えば，円安についての記事を読む．「政策金利」「国債」「為替介入」といった基本的な経済用語についての知識がなければ，一つ一つの意味を確認するだけでも大変である．だが，それらがある程度頭に入っていれば，「なぜ政策金利を上げることが円高方向に働くのか」「物価にはどのような影響があるのか」「それでもなぜ利上げに慎重になるのか」と，書かれている事実の先を考えることができる．

英語でも同じではないだろうか．語彙や文法・構文を覚えること，知識をたくさん持っていることは重要だ．だが，その知識保有の目的は，そのこと自体を誇るためではない．英文を前にしたとき，それらをいちいち調べるのではなく，「考えなくても使える」状態にしておくためである．

一見すると逆説的だが，考えなくてもよいことを増やすことが，考える余裕を生み出す．「覚えること」の価値の一つは，まさにそこにあるのではないだろうか．

2．「読める」と「読んで考えられる」は同じではない

第二言語読解の研究においても，語彙知識の重要性は繰り返し指摘されている．Grabe and Yamashita(2022)は，語彙知識がL1(第一言語)・L2(第二言語)双方の読解理解と読解発達に中心的な役割を果たすことを指摘している．

しかし，単語は分かる．構文も取れる．訳すこともできる．なのに，「筆者の主張をどう思う？」と尋ねると，時々生徒の言葉が止まる．

一方，そのテーマについてよく知っている生徒は違う．「これ，前に読んだ話とつながりますね．」「でも，この場合はどうなんですか．」英文に書かれたことを，自分が既に持っている知識にぶつけているのである．社会，科学，歴史，文化．こうした背景知識を読んだ内容と結びつける．比べる．疑う．知識があるからこそ，私たちは考えることができる．知識と思考力を，安易に二者択一にするべきではない．

例えば，気候変動についての英文を読むとする．二酸化炭素，化石燃料，再生可能エネルギーについて多少なりとも知っていれば，書かれている情報を既に持っている知識と結びつけながら読むことができる．「以前に読んだ話と同じだ」「しかし，経済的な負担については触れていない」といったことにも気づく．

英文を読むこととは，書かれている情報を一方的に受け取ることではない．新しく入ってきた情報を，自分の中にある知識と結びつける．比べる．時には食い違いに気づく．「本当にそうなのか」と疑う．そこから，新しい問いが生まれる．点と点をつなぎ，自身の理解や新たな観点を「再構成」することにも結びつくのである．

3．では，何を覚えるのか

ここで，AI時代の英語学習における知識を，役割から便宜的に三つに整理してみたい．

【A】参照するための知識

細かな数値．低頻度の固有名詞．その場で一度確認すれば足りる情報．こういうものまで，何でも頭に詰め込む必要はない．必要なら辞書を引けばいい．検索してもいい．AIに尋ねてもいい．人間の頭は百科事典ではない．

【B】読むための知識

高頻度語彙．文法・構文．頻出チャンク．これらの知識はしっかりと身につけておきたい．英文を読むたびに単語をAIに尋ね，関係詞が出るたびに構造解析を頼む．それでは，英文を滑らかには読めない．このBは，必要になってから取りに行く知識ではない．必要なときには，すでに使える状態にしておきたい知識だ．

【C】読んで考えるための背景知識

社会，科学，歴史，文化などについての知識である．英文を言語的には理解できる．しかし，その内容を関連づけ，比較し，評価するには，読み手の側にも材料がいる．何もないところには，比較も疑問も生まれにくい．

このように，「A参照するための知識」，「B読むための知識」，「C読んで考えるための背景知識」と，三つに分類してみた．もちろん，これは既存研究で確立された学術的三分類ではない．AI時代の英語教育を考えるための，私なりの整理である．また，同じ知識でも，何をしようとしているかによって役割は変わりうる．大切なのは分類そのものではない．「覚えるか，覚えないか」ではなく，「その知識を何のために持つのか」と考えること，「AI時代に知識は不要」という考えを捨てることである．

AIによって，Aの多くは簡単に外部へ任せられるようになった．だからといって，BとCまで不要になったわけではないのである．

この三つを分けて考えると，「AIがあるのだから覚えなくてもよい」という議論の粗さも見えてくる．確かに，Aの多くは外部に任せることができる．しかし，Bまで外部化すれば，英文を読むたびに処理が中断される．さらにCまで外部に任せれば，目の前の情報を何と結びつけ，何と比べ，どこを疑えばよいのか，その手掛かりまで乏しくなってしまう．

AI時代に必要なのは，「覚える量を減らす」という単純な引き算ではない．何を外に置き，何を自分の中に持っておくのかを選び直すことではないだろうか．

AIは，「覚えなくてよい時代」をつくったのではない．「何を覚えるべきか」を，私たちに改めて問

い始めたのである．

4．「覚える」をどう設計するか

では，ひたすら暗記をさせる教育を行えばいいのか．それも違う．

学習科学では，一度学んだ内容を記憶から取り出す retrieval practice が研究されている．Agarwal ら(2021)は，実際の学校や教室における 50 実験，計 5,374 名を体系的に検討し，49 の効果量のうち 57％で中程度または大きな効果が確認されたと報告している．これだけの規模の調査で実に約 6 割という数値だ．有意性があると判断されるべきであろう．ここから分かることは，ただ「覚えなさい」と言うことではない．覚えることを，学習の終点にしないことが重要だ．新しい英文を読む．その中で，以前に学んだ語彙や構文にもう一度出会う．そして，記憶から取り出して使う．さらに別の英文でも使う．学んだことが次の学びの中で繰り返し使われ，その過程で知識が定着していく．そんな循環をつくりたいものである．

学習アプリを活用すれば，既習事項を適切なタイミングで再び取り出す機会をつくることもできる．ただし，教師が一人ひとりについて，「そろそろこれを思い出させよう」とサポートするのには限界がある．ここは，むしろ DX の得意なところだ．「何度も見せる」だけでなく，「何度も取り出させる」．そして，取り出した知識を，また使わせる．テクノロジーも使いながら，覚えるべきものを，使える知識にしていくことを目指していきたいところだ．

5．AI が答えてくれる．だからこそ

Yan ら(2024)が論じるように，生成 AI には学習支援，多様な教材，迅速なフィードバックなど，大きな可能性がある．ただし，AI が答えてくれるということが，人間は何も知らなくてよいという理由にはならない．

AI が作った英文を読む．なぜこの表現がよいのか考える．別の表現と比べる．「いや，これは少し違う」と疑う．そこにも，こちら側の知識がいる．

人間は，頭の中に知識が無い，或いは少ない状態では，「何を AI に問うべきか」さえ十分に考えられないのではないか．「調べれば分かる」ことと，「頭の中に持っていなくてもよい」こととは同義ではないのではないか．こう考えると，答えは自ずと出る．AI 時代に「覚えること」の価値がなくなるのではないのだ．

これから先，適切な問いを自ら生み出し，新たな知見を読み取り，気づき，さらに新たな問いを作り出すことが重要だ．「クリエイティブ」という言葉の意味に，このような定義が主たるものとして書かれる時代も近いだろう．

いつでも検索でき，いくらでも生成できるようになった今だからこそ，教師が考えるべき問いは以前よりはっきりした．「暗記すること」「覚えること」は悪ではないのだ．「何を，何のために覚えるのか．」が重要なのだと．

私は，そこから AI 時代の英語教育を考えたい．

参考文献

Sweller, J. (2023). “The Development of Cognitive Load Theory: Replication Crises and Incorporation of Other Theories Can Lead to Theory Expansion.” Educational Psychology Review, 35, 95.

Grabe, W. & Yamashita, J. (2022). Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice (2nd ed.). Cambridge University Press.

Agarwal, P. K., Nunes, L. D. & Blunt, J. R. (2021). “Retrieval Practice Consistently Benefits Student Learning: A Systematic Review of Applied Research in Schools and Classrooms.” Educational Psychology Review, 33, 1409-1453.

Yan, L., Greiff, S., Teuber, Z. & Gašević, D. (2024). “Promises and Challenges of Generative Artificial Intelligence for Human Learning.” Nature Human Behaviour, 8, 1839-1850.

（灘中学校・高等学校英語科教諭／英語教育クロスリンクフォーラム組織委員会会長）